

豪雨災害から身を守るには

～ボクたちが感じた懸念～

シンキング・バーズ
データ分析研究班

●豪雨被害の凄まじさ

ボ

クたちは昨年、西日本豪雨の報に接し、東日本大震災以降に日本を襲った風水害での死傷傾向を、独自に分析しまし

た。その中で明らかになったのは、年齢別の傾向として高齢者(いわゆる「災害弱者」)が亡くなられた割合が高いこと、女性は強風で転倒骨折が多いこと、土石流や崖崩れなど土砂災害に巻き込まれた割合が高いことなどを指摘させて頂きました。

10月12日から13日にかけて日本列島を襲った台風19号は、東日本の広い範囲に大きな爪痕を残しました。豪雨による河川の氾濫は、各地で堤防決壊を招き、住宅地域が浸水する被害をもたらしました。西日本豪雨での岡山県倉敷市真備町のケースと似ています。しかも、被災地域が東日本各地の多地点に及びました。また、土砂崩れに家屋が巻き込まれる被害も多発しました。

●安全ではない車での避難

台風19号でも、高齢者が亡くなるケースが多いという印象は拭えません。やはり「災害弱者」の救命問題は、継続的な課題の一つです。また、車で移動中に被災するケースは、ボクたちの傾向分析で一定割合を占めました。今回も車ごと川に転落、増水に巻き込まれて走行不能になり水没または流されたなどの報道に接します。岩手県田野畑村では、車が道穴に落ちて高齢男性が死亡しました。車での避難は、決して安全ではないことを肝に命じるべきでしょう。

●二つの懸念

しかし、今回ボクたちが指摘したいのは、別の点にあります。

① 深夜避難

台風19号の通過は、東北地方の場合は深夜でした。ボクたちが暮らす一関市では、午前零時頃から午前3時頃までが風雨のピークで、普段ならば眠っている時間帯です。仮に増水や停電などに見舞われていたら、暴風雨が吹きすさぶ真っ暗闇の中で、肉体的な疲れを抱えて避難行動をとることになります。悪条件が重なり、避難行動自体にリスクがあるのです。

② 避難所問題

台風接近時には、「避難勧告」「避難指示」などの警報が各地で発令されました。これらの警報は、住民に避難を促すものとして有効な通知だと思います。しかし、以前から気になっていたことですが、数万人単位で収容可能な避難所が、各地で確保できるとは思えないのです。つまり、キャパシティに限りがある避難所が、収容不能になったらどうするのかという問題です。もう一つは、ボクたちの近接公設避難所は、浸水警戒エリア内となり、過去に一角が浸水しました。避難所の方が危険になる可能性がある所に、わざわざ避難するのでしょうか。

自然災害から身を守るには、少しでもリスクを減らす行動が求められます。誤った避難誘導だけは、絶対に避けなければならないのです。(2019年10月17日)

